幼児の運動あそびに関する有能さの 認知とパーソナリティの関係

杉 原 隆 (筑波大学体育科学系)

(昭和59年 3 月27日 受付)

The relationship between perceived motor competence and personality characteristics in preschool children

Takashi Sugihara¹

Abstract

To clarify the effects of physical activity on personality, the relationships between perceived motor competence and personality characteristics in preschool children were investigated. Subjects were 6 years old 81 boys and 92 girls. Through individual interviews, children were asked to what extent they were good or poor player in physical games which they frequently play at kindergarten. Based on the answers obtained, children were divided into high and low perceived motor competence groups.

The main results are as follows.

- 1) In the rating scale, high perceived motor competence boys were rated by their teachers as more confident, active and cooperative with others than low perceived motor competence boys ($p<0.05$).
- 2) In the semantic differential method, high perceived motor competence boys were imaged by their mothers as more vivid, active, submissive and quick and less timid and coward ($p<0.05$).
- 3) As to the girls, only one significantly different item was found in the rating scale. That is, high perceived motor competence group was rated by their teachers as more cooperative with others than low perceived motor competence group ($p<0.05$).
- 4) There were no significant differences between high and low perceived motor competence girls in image scores.
- 5) High perceived motor competence boys were superior to low perceived motor competence boys in motor ability tests and motor ability ratings by the teachers.
- 6) As to the girls, there were no significant differences between high and low perceived motor competence groups in motor ability tests and motor ability ratings by teachers.

These results suggest that, in the early childhood, physical activity give an influence upon personality through the medium of perceived motor competence, especially in the case of boys.

¹ Tokyo Gakugei University, Department of Physical Education, Koganei City, Tokyo (Code 184)

(Takashi Sugihara, "The relationship between perceived motor competence and personality characteristics in preschool children", *Jap. J. Phys. Educ.*, 30-1: 25-35, June, 1985)

問 題

運動経験がパーソナリティの形成・変容に及ぼす影響は体育・スポーツ心理学における重要な関心事である。この問題に関して従来数多くの研究がなされてきたが、運動経験が一定のパーソナリティをつくりあげるといふ科学的証拠は得られていない(Alderman¹⁾, Drowatzky²⁾, Kane¹³⁾, 松田¹⁸⁾, シンガー²¹⁾など)。しかしながら、従来の研究のほとんどは、ある条件(たとえば運動部員、経験年数、競技レベル、運動能力)をもつ対象に何らかの既製のパーソナリティ・テストを実施して比較するという表面的な研究方法をとるにとどまっていたことに大きな限界がある。この限界を克服するには、運動経験がどのようにしてパーソナリティに影響を与えるのかそのメカニズムについての理論的基盤をもった仮説にもとづいて研究を進める必要がある。

このような立場から従来の研究成果を検討してみるといくつかの点が仮説の構築のための手がかりとなる。そのひとつは、運動を組織的・継続的に行なうようになる以前の年齢である児童期や幼児期からすでに、運動能力の高い者と低い者の間にはパーソナリティに差違が認められるという事実である(ハーロック¹⁰⁾, 松田¹⁸⁾, 杉原²²⁾など)。このことは、運動経験とパーソナリティの関係を問題にする場合には、児童期前期や幼児期を対象として研究する必要があること、ならびにスポーツ活動のような外的変数(たとえば運動部員経験年数や競技レベルなど)ではなく、さまざまな運動経験を通して形成される自己の運動能力・技能についての有能さの認知がパーソナリティと結びついているらしいことを示唆している。有能さの認知は内発的動機づけの中核であるとされているが(デジ²⁾)、運動を組織的・継続的に行なったことのない者でも運動に対する興味(内発的動機づけ)の高い者は運動部員と非常によく似たパーソナリティ特性をもつという研究があり(小橋川は

か¹⁵⁾, 西田¹⁹⁾)、有能さについての認知とパーソナリティが結びつくという考えを間接的に支持している。さらに差違の認められるパーソナリティの性質も上述の立場からの予測と一致する。すなわち、運動能力の高い者が低い者とくらべた時に示す高い活動性や外向性、低い劣等感などの特徴は(Hardman⁸⁾, 杉原²²⁾など)、自己が環境との相互作用において有能であるというポジティブな自己概念をもつ場合に現われる行動特徴であるといえる。加えて、ハーロック¹⁰⁾も指摘するように、幼児期においては運動発達の程度がその子どものできないことを大きく規定することから、運動の有能さについての認知が自己概念の中核となることは十分考えられる。

以上のような事柄を考慮すると、運動がどのようにしてパーソナリティ形成に関与するかという理論的枠組みとして、運動することそれ自体が直接影響をもつのではなく、自己の運動能力・技能についての有能さの認知(あるいは獲得された無力感)を媒介として関係しているという認知理論的な仮説が非常に有力なものとなる。

そこで本研究は、このような認知論的な立場から、幼児を対象として自己の運動の有能さについての認知とパーソナリティの関係を明らかにする目的で計画された。具体的には以下のような仮説が問題にされる。1) 運動あそびについての有能さの認知の高い者は低い者より積極的で自信をもち自律心が強いなど、両者のパーソナリティに差が認められるであろう。2) 有能さの認知とパーソナリティの関係には性差が認められるであろう。なぜならば、幼児期は性役割の認知が成立する時期であり、運動あそびの有能さは女子より男子において高い価値が与えられているからである(小橋川¹⁴⁾, 間宮¹⁶⁾, など)。したがって両者の関係は女子より男子に顕著にあらわれるであろうと考えられる。3) 運動能力のすぐれた者、教師から高く評価されている者ほど高い有能さの認知をもつであろう。このことが検証されれば、1), 2)の確から

しさを裏づけることになる。

方 法

対象

私立幼稚園の年長児，男児82名，女児91名計173名を対象とした。幼児を対象としたのは，この年齢になると評価対象としての自己意識が現われ（梶田¹²⁾），それが運動発達と行動とを媒介するという役割を果たすようになると考えられるからである。本研究の対象となった園は，日常の保育の中で運動とくにサッカーあそびを継続的に取り入れており，年長児はこの点でも自己の運動あそびにおける有能さの認知を形成する十分な機会をもっていたといえる。

有能さの認知と自己意識の測定

1人10—15分間にわたる個人面接を行なった。面接には，クラス担任の補助のかたちで対象児の保育を経験し，さらに運動能力の測定を通してすでに顔なじみになっていた幼児教育専攻の大学4年生が，あらかじめ作成された面接要項にしたがって実施した。

運動あそびの有能さの認知は，園でよく行なうサッカーあそびと，休日や家に帰ってから行なう園外での運動あそびについて，それらがどのくらい上手にできているかを探ねた。すなわち，まず，上手にできるのか上手にはできないのかを探ね，上手にできると答えた者には「とても上手にできる」のか「少しは上手にできる」のかを探ね，上手にはできないと答えた者には「少しだけ下手」なのか「とても下手」なのかを探ねた。

さらに，子どもの自己意識をとらえようとする発達の力動過程検査（Zazzo and Mathon）の中から，都筑²³⁾が幼児に実施して得た結果を参考にして，2つの質問をとりあげた。ひとつは，もしなれるとしたら赤ちゃんになりたいかおとなになりたいか今のままの自分がよいかを探ねるものであり，他の時期にくらべて現在の自己がどのように意識され価値づけられているかをみようとするものである。もうひとつは，1年前にくらべて自分のどこが変わったかについての質問であり，子

どもが自己の変化をどのように意識しているかをみようとするものである。

パーソナリティの測定

子どものパーソナリティを，幼稚園における行動，家庭での行動，あまり慣れていない人に対する反応の3つの側面からとらえようとした。

教師による行動評定：有能さの認知と結びつき易いと考えられる積極性・自信など表1に示したような7つの行動特徴について簡単な説明をつけ，園での日常の行動にもとづいて担任の教師に1人1人の子どもについて5段階で評定を求めた。評定に先立ち，担任教師に対して説明を行ない，評定の内容および評定の仕方を，熟知徹底するようにした。評定者による偏りを避けるため，各クラスの男女別の人数によりあらかじめ正規分布を仮定した理論出現頻度を算出しておき，それにもとづき強制法により各クラスの中での相対的な評定を次求めた。

母親の子どもに対するイメージ：母親が子どもに対してどのようなイメージを抱いているかを知るため深谷⁹⁾らが作成した幼児のイメージ尺度を用いて，子どものパーソナリティの測度のひとつとした。用いられた形容詞対は図1に示した24個であり，因子分析の結果から7つの因子を代表することが明らかにされたものである。

面接者の行動観察：個人面接を実施した時の反応を，質問に対する回答の速さ，口数，話し方，人見知り，面接中の動作の5つの観点について3段階で評定した。

運動能力の測定

運動能力テスト：東京教育大学体育心理学研究の幼児運動能力検査項目の中から，もっとも基本的な能力を測定していると考えられる25m走，ソフトボール投げ，立ち幅とびの種目を取りあげ実施した。テストの実施は，測定についてのトレーニングを受けた体育専攻の大学院生と学部学生が担当した。

また，幼児期の運動発達の特徴を考慮して，体育科学センター作成の調整力テストの中からとび越しくぐり，反復横とび，ジグザグ走の3種目も合わせて実施した。

教師による運動の評定：テストによって幼児の運動能力をとらえることの限界を考慮して、園でのさまざまな運動あそびの場面の観察にもとづく教師の評定を求めた。評定は表4に示した10項目であり、各々に簡単な説明を付しておいた。評定の方法は行動の場合と同じで、理論出現頻度にもとづくクラス内での強制法による相対的な5段階評定である。

結 果

1. 有能さの認知とパーソナリティの関係

教師による行動評定について：有能さの認知は4段階で回答されたが回答分布に偏りが生じたため、園での運動あそびは上手と下手の2分割、園外での運動あそびはとても上手、少し上手、下手の3分割とし、それぞれの群について比較を行った。

園での運動あそびについてみると(表1)、男児の集中力、女児の忍耐力、情緒安定性を除いて他のすべての項目において上手群が下手群より高く評価されている。評定は男女別になされ性の主効果は出ないようになっているが、性と有能さの認知との交互作用にも関心があるため、性×有能さの認知の2要因分散分析を行なった。その結果、協調性、積極性、自信、全項目の合計点で有能さの認知の主効果が有意($p<0.05$)となった。そこ

で、男女に有能さの認知の単純効果の検定を行なったところ、男子では上記4項目のすべてに有意差($p<0.05$)が認められた。すなわち、男児の場合有能さの認知の高い者は低い者より、日常の園での行動において自信に満ち、何事にも積極的にすすんで取り組み、協調性に豊み友人関係が良好であり、園での行動が全体的により望ましいと評定されていることが明らかになった。これに対して、女児では、全体としては男児とよく似た傾向があるものの、有意差の認められたのは協調性1項目のみであった。

園外での運動あそびの有能さの認知と行動評定の関係は表2に示したとおりである。男女とも2-3の項目を除いて、とても上手群が少し上手・下手群より、また、とても上手・少し上手群が下手群より高く評定される傾向が認められる。しかしながら、分散分析の結果有意な差($p<0.05$)がみられたのは男児の自信1項目のみで、とても上手・少し上手に外あそびができている者が下手だと思っている者より園で自信をもって行動していると評定された。

母親の子どもに対するイメージについて：園での運動あそびの有能さの認知の高低によって母親が子どもに対して抱いているイメージが異なるかどうかを調べたところ、結果は図1と2に示したようになった。全体的にみると、男女とも上手群

表1. 園での運動あそびの有能さの認知別にみた教師による行動評定点の平均と標準偏差。

男 児								
群	項目	協調性	積極性	自立心	自信	集中力	忍耐力	情緒安定性
上手 N=46		3.3 0.9	3.2 0.9	3.2 0.9	3.2 1.0	3.1 0.9	3.1 0.9	3.1 0.9
下手 N=28		2.8 0.8	2.7 1.0	2.8 0.9	2.7 0.8	3.1 0.9	2.9 1.0	3.0 0.9
有意差		$p<0.05$	$p<0.05$	N.S.	$p<0.05$	N.S.	N.S.	N.S.
計								
		22.2 4.8						
女 児								
群	項目	協調性	積極性	自立心	自信	集中力	忍耐力	情緒安定性
上手 N=34		3.2 1.0	3.1 1.0	3.0 1.0	3.1 1.1	3.0 1.0	2.9 0.9	2.9 0.9
下手 N=44		2.8 0.8	3.0 0.9	2.9 1.0	2.9 0.8	2.9 0.9	3.0 1.0	3.1 0.9
有意差		$p<0.05$	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
計								
		21.2 5.0						
		20.5 4.3						

表2. 園外での運動あそびの有能さの認知別にみた教師による行動評定点の平均と標準偏差.

男 児								
項目 群	協調性	積極性	自立心	自信	集中力	忍耐力	情緒安定性	計
とても上手 N=22	3.2 1.0	3.0 1.0	3.0 1.0	3.1 0.9	3.0 0.9	2.9 1.0	2.9 0.9	21.0 5.0
少し上手 N=30	3.0 0.9	3.1 1.0	3.2 1.0	3.2 0.9	3.2 1.0	3.2 1.0	3.2 1.0	21.9 4.8
下手 N=21	2.8 1.0	2.8 0.9	2.8 0.9	2.5 0.8	3.0 0.8	3.0 0.9	3.0 0.9	19.8 4.3
有意差	N.S.	N.S.	N.S.	p<0.01	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

女 児								
項目 群	協調性	積極性	自立心	自信	集中力	忍耐力	情緒安定性	計
とても上手 N=31	3.2 0.9	3.1 1.0	3.3 1.0	3.1 1.0	3.2 1.0	3.2 1.0	2.9 1.0	22.4 5.0
少し上手 N=37	2.9 0.9	3.0 1.0	2.8 0.9	2.9 1.0	2.9 1.0	3.0 1.0	3.2 0.9	20.8 4.7
下手 N=18	2.9 0.7	2.7 0.7	2.8 0.7	2.8 0.8	2.9 0.7	2.8 0.8	2.8 0.8	19.7 3.0
有意差	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

が下手群より左寄りで、母親から望ましいイメージをもたれていることがわかる。そこで、有能さの認知×性の2要因分散分析を行なったところ、5つの尺度（生き生きした—元気がない、従順な—反抗的な、気が強い—気が弱い、勇敢な—臆病な、すばしっこい—のろまな）と2つの要因合計点で有能さの認知の主効果が有意（ $p<0.05$ ）となった。さらに、男女別に有能さの認知の単純効果の検定を行なったところ、男児に有意差の認められる項目が1つ加わった。すなわち、男児では、上手群の方が下手群より生き生きしており、従順で、積極的で、すばしっこく、下手群は上手群より気が弱く、臆病だと母親からみられているといえる。また、深谷が見出した7つの因子のうちの2つの要因合計点に認められた差から、上手群の方が下手群より健康的であり、独立性に豊む強い性格をもっているとみられていることが明らかになった。これに対しては女兒は、男児とよく似た傾向がみられたにもかかわらず、統計的な有意差はどの尺度、要因合計的にも認められなかった。

次に、園外での運動あそびについても検討を加えたが、男女とも有能さの認知による差はほとん

どみられなかった。ただ、男児のたのもしーたよりない、積極的な—消極的なの2つの尺度において、有能さの認知の高い群ほどたのもしく積極的であるというイメージを抱かれている傾向が比較的是っきりみられたが、分散分析の結果は有意ではなかった。

面接時の行動観察について：面接時の行動観察の評定分布を、園での運動あそびの有能さの認知によって比較したところ、男児の回答の速さについてのみ有意差がみられ（ $\chi^2, p<0.05$ ）、上手群の方が下手群より答えがすぐ返ってくると評定された者が多かった。この他、元気にはきはき答える者、人見知りをする者が少ない傾向もみられたが検定の結果は有意ではなかった。女兒では、有能さの認知による観察項目の差はほとんどみられなかった。

園外での運動あそびでは、男児でもとても上手群が少し上手・下手群より答えがすぐ返ってくる者、元気にはきはき答える者が多く、口数の少ない者、じっとしている者が少なかった（ $p<0.05$ ）。園での運動あそびと同様、女兒にはほとんど差はない。

図1 園での運動あそびの有能さの認知別にみた母親の子どもに対するイメージ (男児)

図2 園での運動あそびの有能さの認知別にみた母親の子どもに対するイメージ(女児)

2. 自己意識と有能さの認知およびパーソナリティとの関係

運動あそびの有能さの認知が自己意識の発達に関与しているかどうかをみるため資料を分析した。都筑²³⁾の研究によると、4～6歳と年齢が大きくなってゆくにつれておとなを選択する者が少なくなり今の自分の年齢を選択する者が多くなって自己に対する意識が肯定的で強くなってゆくとされている。そこで、園内・外での運動あそびについて、有能さの認知別に今の年齢とおとな・赤ちゃんの選択者の比を算出して比較したが、男女とも有能さの認知による選択の差は認められなかった。また、自己の変化についての質問に対しては、わからないとかまと外れの回答が多く、統計的な分析をすることができなかった。

さらに、現在の自己に対する意識とパーソナリティの関係をみるために、今の自分の年齢の選択者とおとな・赤ちゃんの選択者について教師による行動評定と母親の子どもに対するイメージを比較したが、有能さの認知と自己意識の間に関連がみられなかったことから予測されるように、両パーソナリティ測度ともすべての項目において有意な差は見出せなかった。

3. 有能さの認知と運動発達の関係

運動あそびの有能さの認知は、運動の出来映えについての自己評価や仲間や教師や親などの他者

からの評価によって形成される。したがって、その根底には運動発達の水準が大きく関与していると思われる。そこで、運動能力測度と有能さの認知の関係を調べてみた。

運動能力テストについて：まず、園での運動あそびの有能さの認知別に運動能力テスト得点（年齢別・男女別に作製された5段階評定点）を示すと表3のようになる。女児では有能さの認知のちがいで運動能力テスト成績にほとんど差がないのに対して、男児では上手だと認知している者が下手だと認知している者より明らかに得点が高く、3つの種目と3種類の合計点において有意差が認められた。

園外での運動あそびでは、園でのあそびの場合と同様女児には有能さの認知による差はまったく見出せなかった。また、男児では、多くの種目において、特に3種類の合計点において有能さの認知が高くなるほど運動能力テスト得点も高くなる傾向がみられたが、その差が有意であったのは立ち幅とび1種目のみであった。

さらに、発達の力動検査による今の自分の年齢の選択者とおとな・赤ちゃんの選択者について運動能力得点を比較したが、差はみられなかった。

教師による運動評定について：表4は園での運動あそびの有能さの認知別に教師による運動評定点を示したものである。運動能力テストの場合と

表3. 園での運動あそびの有能さの認知別にみた運動能力テストの平均と標準偏差

男 児									
群	項目	25m 走	立ち幅とび	ソフト ボール投げ	計	とび越し くぐり	反復横とび	ジグザグ走	全体
上 手		3.6 0.6	3.1 0.7	3.0 0.8	9.6 1.3	3.3 0.7	3.7 0.7	3.9 0.7	13.5 1.6
下 手		3.4 0.9	2.7 0.7	2.3 0.7	8.4 1.5	2.7 0.8	3.4 0.8	3.7 0.6	11.6 1.7
有意差		N.S.	p<0.05	p<0.001	p<0.01	p<0.01	N.S.	N.S.	p<0.01
女 児									
群	項目	25m 走	立ち幅とび	ソフト ボール投げ	計	とび越し くぐり	反復横とび	ジグザグ走	全体
上 手		3.6 0.8	3.0 1.1	2.8 0.8	9.5 2.2	2.7 0.9	3.0 0.9	3.8 0.5	12.6 2.6
下 手		3.6 0.7	3.1 0.9	3.0 0.8	9.9 1.7	2.5 1.0	3.2 0.6	3.9 0.6	13.1 2.1
有意差		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

表4. 園での運動あそびの有能さの認知別にみた教師による運動評定点の平均と標準偏差

男 児												
群	項目	力の強さ	敏捷性	持久力	器用さ	平衡感覚	リズム感	ボールあそび	鉄 棒	かけっこ	サッカー	計
上 手 N=46		3.2 1.0	3.3 1.0	3.2 0.8	3.3 0.9	3.3 1.0	3.2 0.9	3.3 0.9	3.4 0.9	3.3 0.9	3.3 0.9	32.9 7.4
下 手 N=28		2.7 0.6	2.8 0.8	2.8 1.0	2.7 0.8	2.8 0.8	2.7 0.9	2.6 0.9	2.7 0.8	2.7 0.8	2.6 0.9	27.1 6.5
有意差		p<0.05	p<0.05	N.S.	p<0.01	p<0.05	p<0.05	p<0.01	p<0.01	p<0.01	p<0.01	p<0.01
女 児												
群	項目	力の強さ	敏捷性	持久力	器用さ	平衡感覚	リズム感	ボールあそび	鉄 棒	かけっこ	サッカー	計
上 手 N=34		3.1 1.0	2.9 0.9	2.9 0.9	3.0 1.0	2.9 0.9	2.9 1.0	2.9 1.0	3.0 1.0	3.0 0.9	3.0 1.0	29.7 7.5
下 手 N=44		2.8 0.8	2.9 0.9	3.0 0.9	2.9 0.8	2.9 1.0	3.0 1.0	2.8 0.9	2.8 1.0	2.9 1.0	2.8 0.8	28.8 6.7
有意差		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

同様、女児では上手群と下手群の間にはほとんど差がないが、男児では持久力をのぞく他のすべての評定項目と合計点に有意差がみられ、有能さの認知の高い者が低い者より教師から多くの運動において能力が優れていると評価されていることが明確に示されている。

園外での運動あそびについては、運動能力テストの場合と同様の結果が得られた。すなわち、有能さの認知による差は女児ではほとんどなく、男児では有能さの認知の高い者ほど評定点も高い傾向が多く種目でみられたが、どの場合も有意な差ではなかった。

考 察

有能さの認知とパーソナリティの関係ならびにその男女差については、教師による評定、母親の子どもに対するイメージ、面接者の行動観察の結果からみて、全体的にはほぼ仮説を支持する結果が得られた。特に、有能さの認知と結びつき易いと考えられていた自信や積極性などについて予想通りの差が見出されたことは、仮説に有利な結果であるといえよう。

園外での運動あそびより園での運動あそびの有能さの認知の方がパーソナリティとより明確に関連していることが明らかにされた。これは、保育

時間の中で全員が参加してしばしば行なわれる活動であるということで、園外での運動あそびより自我関与が強く、また、仲間と自分を比較したり仲間や教師から評価をうける機会が多いために、有能さの認知が明瞭なかたちで形成されていたことによるものと思われる。園外での運動あそびの場合は、同じあそびをする機会も一緒にあそんでいる仲間の数も少ないことが面接の結果から明らかにされている。さらに、有能さの認知と運動能力テストならびに教師の運動評定の間にはっきりした関係が見出せなかったことは、有能さの認知があまり明確でないことを示唆しており、そのために日常の行動と結びつきにくかったのではないかと推測される。

以上のような解釈は、また、有能さの認知とパーソナリティの関係の男女差についての結果の解釈とも整合性をもつ。すなわち、女児は男児より運動に対する自我関与が小さいため有能さの認知があいまいなかたちでしか形成されず（有能さの認知と運動能力テストならびに教師による運動評定との関連がほとんどみられない）、その結果パーソナリティとの結びつきも弱くなっているものと考えられる。仮説では、客観的な運動発達と有能さの認知の関係についての性差は問題にしていなかったが、本研究の結果は、運動あそびの有能さ

の認知の発達に男女差がみられることを示唆している。

運動経験や運動発達が幼少年期の自己意識や自己概念の形成に重要な役割を果たすことを指摘する発達心理学者は多い(フロスティック⁴⁾, Gallahue⁶⁾, ハーロック¹⁰⁾, Jersild¹¹⁾など)。しかしながら、客観的な運動発達の測度と自己概念・自己意識の関係については、認められるとする研究もある(Guyot et al.⁷⁾, Platzner²⁰⁾)が認められないとする研究もあり(Williams²⁴⁾)、必ずしも明確にされているとはいえない。本研究では自己意識の指標として発達の力動検査の一部を使用したわけであるが、運動発達とも有能さの認知とも関係を認めることができなかった。この点については、自己意識・自己概念をどのように測定するかその方法の妥当性をも含めてさらに検討する必要がある。

本研究の結果は、運動に関する有能さの認知の形成が幼児の行動傾向に影響を与えるという仮説を大筋で支持するものであった。同様に、運動は何らかの心理過程を媒介として行動傾向に影響を与えるのであり、運動それ自体が直接関与しているのではないことを示唆している研究が他にもある。たとえば、同じ体育の授業でも教師主導型の授業ではみられなかった自己概念の発達が、児童が授業におけるさまざまな決定に参加する授業では認められたとする研究(Martinek et al.¹⁷⁾)や、ゲームでいつも勝つか負けるかしている者には自己概念の変化がみられたが勝ち負けの頻度が同じくらいの者にはみられなかったとする報告(Harris⁹⁾)がそれである。これらは直接運動に関する有能さの認知を取りあげているわけではないが、その内容からみて有能さの認知と深い関係をもつことが推察される。

以上の点を総合的に考察すると、運動に関する有能さの認知という概念は運動がパーソナリティに与える影響を解明するための有力な理論的枠組みを提供するといえよう。今後両者の関係をさらに多角的に検証するとともに、有能さの認知の形成過程やどのような場合有能さの認知がパーソナリティに影響するのかその条件についての研究が

期待される。

引用・参考文献

- 1) Alderman, R.B., Psychological behavior in sport, W.B. Saunders: Philadelphia, 1974. pp. 109—51.
- 2) デシ(安藤延男・石田梅男訳), 内発的動機づけ, 誠信書房, 1980. pp. 3—142. (Deci, E.L., Intrinsic motivation, Plenum: New York, 1975.)
- 3) Drowatzky, J.N., Motor learning, 2nd ed., Burgess: Minneapolis, 1981. pp. 155—70.
- 4) フロスティック(肥田野直ほか訳), ムーブメント教育, 日本文化科学社, 1978. pp. 4—5.
- 5) 深谷和子・麻生明子・馬場道子「幼児のイメージ尺度作成の試み」東京教育大学教育相談研究施設紀要, 12: 23—48, 1972.
- 6) Gallahue, D.L., Understanding motor development in children, John Wiley and Sons: New York, 1982. pp. 320—38.
- 7) Guyot, G.W., Fairchild, L. and Hill, M., "Physical fitness, sport participation, body build, and self-concept of elementary school children," International Journal of Sport Psychology, 12: 105—16, 1981.
- 8) Hardman, K., "A dual approach to the study of personality and performance in sport," in Whiting, H. T.A., Hardman, K., Hendry, L.B. and Jones, M., Personality and performance in physical education and sport, Henry Kimpton: London, 1973. pp. 77—122.
- 9) Harris, D.V., Involvement in sport: a somatopsychic rationale for physical activity, Lea and Febiger: Philadelphia, 1973. p. 170.
- 10) ハーロック(小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫訳), 児童の発達心理学 上, 誠信書房, 1971. pp. 224—78.
- 11) Jersild, A.T., Child psychology, Prentice-Hall: Englewood Cliffs, 1960. p. 60.
- 12) 梶田寛一, 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 1980. pp. 191—224.
- 13) Kane, J.E., "Personality, body concept and performance," in Kane, J.E. (Ed.), Psychological aspects of physical education and sport, Routledge and Kegan Paul: London, 1972. pp. 91—127.
- 14) 小橋川慧, 「性差と性役割の期待」岡本夏木ほか(編), 児童心理学講座, 第8巻, 金子書房, 1969. pp. 135—84.
- 15) 小橋川久光・杉原 隆・豊田一成・西田明子・兵頭 寛「中学生のレクリエーション的身体活動に対する興味とパースナリティの関係」琉球大学教育学部紀要第18集, 61—67, 1975.
- 16) 間宮 武, 性差心理学, 金子書房, 1979. pp. 229—73.
- 17) Martinek, T.J., Zaichkowski, L.D. and Cheffers, J. T.F., "Decision-making in elementary age children: Effects on motor skills and self-concept," Research Quarterly, 48: 349—56, 1977.
- 18) 松田岩男, 体育心理学, 大修館, 1979. pp. 288—92.

- 19) 西田明子「身体活動に対する興味とパーソナリティの関係」東横学園女子短期大学紀要, 10号: 105-09, 1971.
- 20) Plazer, W.S., "Perceptual motor training on gross-motor skill and selfconcept of young children," *The American Journal of Occupational Therapy*, 30: 423-28, 1976.
- 21) シンガー (松田岩男訳), 運動学習の心理学, 大修館, 1970, pp. 350-53.
- 22) 杉原 隆, 「身体・運動の発達と精神発達」鷹野健次ほか(編), 体育心理学研究, 杏林書院, 1972, pp. 131-42.
- 23) 都筑 学「幼児の自己意識の発達」教育心理研究, 29: 70-74, 1981.
- 24) Williams, H.G., *Perceptual and motor development*, Prentice-Hall: Englewood Cliffs, 1983, pp. 282-322.
-